

---

# どうやら僕は二重人格らしい

Twice

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

どうやら僕は二重人格らしい

### 【Nコード】

N7680Y

### 【作者名】

Twice

### 【あらすじ】

少年は出会う。歴戦の王の記憶を継ぐもの、最強の力を持つものたちに。少年は想う。この力は誰かを守れるのか、と。答えは先にある。少年はゆっくりと歩き始めた。

どつやら僕は二重人格らしい(前書き)

新しい小説です可愛がってください。

## どうやら僕は二重人格らしい

朝起きて、朝ごはんを作り、それを食べ学院に向かう。何も変わらない日常に新たなスパイスが加わったのは春だった。

Set 学院と呼ばれるこの学院は初等科と中等科に別れており、エレベーター方式で上に向かって行く。そんなハイレベルの学院に通う生徒が1人、始業のチャイムが鳴ったのにも関わらず学び舎の外を歩いていた。男のようで、少々ズボラなのか寝癖が所々あるが、何処か愛嬌のある顔立ちをしている。

少年は眠たそうに欠伸をすると、辺りを見渡し、ちょうど良い木陰があつたのか、見つけると一目散に走って行き、腰をおろした。

寝そべると新しいクラスになった初日のことを思い出していた。今思えばあれこそが最大の失態であつたと、唇を噛み締めながら。

「新しい仲間たちと交流を深めるために自己紹介をしましょう」

もはや呪いのレベルで存在する恒例行事、自己紹介。物静か人にとっては苦痛、快活な人にとっては屁でもないであろうこの行事の前に、エリアス――先ほどの少年である――は大変困惑していた。

『エリアス・オルバ』という名前ではやはり最初の方にきてしまう。自称シャイなエリアスには、中々難しい注文である。

『俺が代わりにやってやるうか？』

幻聴まで聞こえてくる始末だ。どうしようか、迷ったのも束の間目の前の席のストラトス？ という少女の自己紹介は終わっていた。

まるで処刑台に向かう死刑囚のように、俯きながら前の教段に行く。心配ない、僕には出来ると、心の中で呟きながら。

「エリアス・オルバです。好きな事はスポーツをしたりすることで  
す」

ああ、言えた。良かった、これで安心して学院生活が過ごせる。エリアスは心の底から安心した。しかし……。

『面白そうだなあ、代われよ』

油断した。完全に忘れていた。さっきは空耳と思い無視したが、こいつに今度は乗っ取られる。

さようなら、僕の平和（予定）の日常、こんにちわ、クソつたれな日常。エリアスは身体の中に押し戻される感覚を味わいながら、律儀に挨拶をしておいた。

「よろしくお願ひします。…このクソ童貞と尻軽女共」

ピシ…！

教室の空気は凍った。エリアスの意識はここでシャットダウンされた。

S i d e エリアス

そこまでが覚えている事だった。気づいたら家で寝ていた。恐らくもなにもその日の内に僕のこととは学院中を駆け巡っただろう。あらぬ尾ひれをつけながら。

「なんであんなことしたんだよ」

誰もいないけど言葉にする。答えは自分の中から聞こえてきた。

『駄目だったか？ 俺は楽しかったぜ』

この時点で僕はもうあきらめる。どう言っても無駄だとわかっているから。けど、納得がいかない。先生には僕が二重人格だと話を通していているのに、どうやら何も説明はないらしい。

行きたくないな、そう思うと運が良いのか悪いのか、1限目のチャイムがなり終わった。

教室の前に立つと物凄く心臓がバクバクしてきた。今度はオチを知っているのにタイタニック号に乗った気分だ。死亡フラグだ。

初日の印象が悪いのに加えて、1限目をさぼるといふ快挙。僕は不良になりたいのだろうか？ 答えは無論NOだが。

そうだ、きつとみんな純粹だから童貞とか尻軽女とか意味を知らないはずだよな！？ そうだ、きつと大丈夫だ、問題ない。

僕は勇気を振り絞ってドアを開けた――！

そして、速攻で閉めた。

……死ぬほど睨まれた。

『チヨ一受けるWWW』

絶対あいつSだ。傷口に塩を塗りこんでお湯につけるやつだ。泣きつ面蹴ったり殴ったり祟られたりとはこのことか！

もう、僕の豆腐メンタルは粉々だ。黙って教室に入ろう……。やっぱり睨まれたけど。

そして、昼休みになって。

「おい、ちょっとお前ついて来い」

見知らぬクラスメイトが僕を呼ぶ。

『あ、あいつは俺がー1番貶したやつだWWW』

え？ つーことは間違いなくパシリとかリンチフラグだよな？ 痛いのは勘弁だな……。

「おい、なんかいったらどうなんだよ!!」



「お前、こいつ怒らせるとマジハンパねえぞ!!」

「俺たちは知らないからな」

僕はまずあなた達ことすらわからないんですが…。どうしょ、このままじゃ余計な事まで起きそうだし、ついて来うかな。

「…わかった」

「素直に来ればいいんだよ」

目の前のクラスメートよりもあいつが余計なことをしないか心配になった。喧嘩とかだったら勝てるだろうけど、したくないなあ。

ぜひやら僕に問題らしい(前書き)

週に一回、更新を予定しています。

## どうやら僕に問題らしい

エリアスが連れてこられたのはグラウンドだった。しかし周りに植えてある木々によって辺りからは死角になっている。

クラスメートの3人、仮にA、B、Cとしよう。いわゆる悪ガキ3人トリオだ。中等科生活2日目にして、既に厄介なやつらに目を付けられていた。

「テメーよう、なんだよあの挨拶はよう。俺たちに喧嘩でも売ってんのか？ アアン？」

「別にそんなわけじゃないよ……」

正直言ってエリアスはとても面倒臭かった。お腹が空いた、すぐにご飯が食べたい、と心中思っていた。しかし、それは叶わない。

なにせ3人だ。1人なら問答無用で黙らせていたが、なにぶん分が悪い。楽に事態を収束させられるか、考えているとB（リーダーっぽいのがAだ）がエリアスに突っかかってきた。

「何とか言ったらどうなんだよう、この野郎？」

直後、痺れを切らしたBがエリアスに殴りかかってきた。微かな残像を残しつつその拳はエリアスの頬に届く……！ 筈だった。

「人が折角何も起きないように考えていたのに……」

拳は頬の手前でエリアスの手によって止められた。そのことに、3

人は動揺する。

「殴ってきたのなら、殴り返されても言い訳出来ないよね」

「ぐあ…！」

エリアスは掴んだ拳を握りつぶそうと力をいれる。Bの表情が苦痛を訴える。拳はフルフルと震え、全身から冷や汗が溢れ出してくる。

「て、てめケンジをよくも？」

「ここなら、誰も見てないし…魔法を使ってもいいんだよ？」

「「？」」

通常、市街地等で魔法を行使するには特別な権限や急を要する場合、限られた場所等では出来ない。それはこの学院内においても同様である。

すなわちエリアスの発言は相手を小馬鹿にしているようなものである。

「上等じゃねえか、そっちがその気な」

「タケシ！？」

「油断大敵だね」

言葉よりも拳は速く。タケシと呼ばれる少年の鳩尾を貫く。たったの一撃で意識を奪い取る。

「さあ、君はどれくらいなんだい？」

「く、くそがー？」

魔力がたいして纏まらぬまま打ち出された力の塊は、糸もたやすくエリアスの拳によって砕かれ消滅していった。

「こんな筈じゃない、こんな筈じゃなかったんだ？」

後悔先に立たず、己を知り敵を知れば百戦危うからず、どの言葉でも形容できよう。間違いではなかった。ただ彼らは知らなさ過ぎたのだ、エリアス・オルバという男を。

エリアスは1歩ずつ歩いて行く。その間にもシューターは打ち出されるが、遠く及ばず消えていて行く。そして、彼の目の前にエリアスは立ち塞がった。

「Good luck」

無慈悲にそう呟き、最後の1人に一撃を屠った。

結果、あの3人は何も出来ず一方的にやられただけだった。エリアスが3人を一目見て去ろうとした時、ふと何もいない筈の1本の木

を見た。が、すぐに腹の音がなり踵を返すように教室へ弁当を取りに帰った。

何も得られなかった、と思いながら。

### S i d e 謎の少女

気付かれた、いや気付いていたのでしよう。私が彼らを追いかけて、木の後ろに隠れて様子を見ていたのを。

あの3人は何も出来ず一方的にやられただけだった。しかし、あの人は違った。魔力の強化も無しに3人を相手にして一撃で倒し、まるで蟻を踏み潰すだけのように簡単に終わらせてしまった。

まだまだ底知れない力を持っている彼と是非1度戦いたいと思った。しかし、私の当面の目標は現代を生きる聖王女のクローン。彼にお手合わせを頼むのは、それからでも遅くないでしょう。

しかし、『どーてー』や『しりがるおんな』とはどういう意味でしょうか？

S i d e エリアス

昼休みは思いのほか短く、帰ってきた頃には昼休みは終わりを告げていた。

『 どういう心境の変化だ？ 』

『 何が？ 』

質問を質問で返すのはやぶさかではないが、もう1人の自分なのだ。気にしない。

『 いつものお前ならヤツちまったりしねえだろう 』

『 そんなことか。単純に自分の欲求を満たそうとしただけだよ 』

『 破壊衝動か？ 』

『 食欲だよ？ 』

わかっていてこれだから困る。それより、あの碧銀の髪の人。なんであんなところに？

考えてもわからないか。とりあえずは……。

『ヒソヒソ…あの3人帰ってこないよ』

『きつとやられたんだ…ヒソヒソ』

この状況は好ましくないよね……。どうにか出来ないかなあ？

放課後になって、職員室に呼ばれた。絶対さっきのことだろう。謹慎処分とかいやだなあ。 謹

「失礼します」

ドアを開けると、さっきの3人と恐らく、その母親、そして教師のシスターがいた。

相手の母親からは物凄いオーラを感じる。怒りのオーラ。修羅に見えてきた。



「エリアス君、ここに座ってください」

僕らのクラスの担任教師でもある彼女に椅子に座るよう促される。

「先生、これは大変な事態ですよ。校内暴力なんてもつての他です。うちの子は怪我をしたんですよ？」

怪我をさせるほど強くはしてないのにな。速く帰りたい。今日は筋トレの量が多めなのに。

「ほんと、こういう教育をしているんでしょう？」

まったくだよ。教育がなってない。弱すぎだよ、真面目にトレーニングしてないのかな？

「そういえば、この子の親はまだなんですか？ いい加減怒りますよ？」

「親なんていませんよ」

「「「！？」「」」

「ちよ、エリアス君？」

僕の親なら昔に死んだ。別にどうと思わない。あんな屑共はもっと早く死ねばよかったのに。

「ブツブツ…親に捨てられたのね。教育してもあんなのだから、捨てられて当然ね」

「うちの子がいかにデリケートかも知らないで怪我を負わせたのね。許せないわ」

そのセリフに3人は身体を1度ビクツとさせ、俯いた。

「こんな子は退学でいいんじゃないのですか？」

さつきから先生は矢継ぎ早に言われるので困っていた。勝手に脚色されたな。僕が3人を一方的にやっみたいじゃないか。結果はそうだけど、実際は相手から殴ってきたのに。

『代わってやるうか？』

『いやだ、どうせ火に油を注ぐだけだし』

確実に状況は悪化するであろう。余計面倒なことになる。正直に言っても聞きやしないだろうし、どうしたものか。

「・・・失礼します」

突然、職員室に響く凜とした声。全員がその声のした方向を向いた。

「ストラトスさん？ 今は入らないで頂きたいのですが・・・」

「先生、オルバさんは悪くありません」

行き成りの発言に先生はびっくり。周りもびっくり、俺もびっくり。

「ど、何処にそんな根拠が・・・！」

「私がこの眼でしっかりと見ました」

そう言つて、自分の眼をしっかりと見開いた。彼女の眼は虹彩異色、それも蒼と紫の…。

碧銀の髪に加え虹彩異色。

ああ、きっと彼女は…。

早合点か、そう思い考えをストップさせる。彼女の眼に見とれていた親どもが気を取り直す。

「そん「母さん、俺たちが悪いんだ」!？」

何かを言おうとした時、あの大将の子が口にした。いや、僕も悪いんだんだけどね。

「俺たちがエリアスさんのことをよく知らないで……」

その言葉に2人もしゅんと俯く。てか、エリアスさんって何？

結局、親の暴走はこれで治まり事件は解決に向かつて行った。余談であるが、僕たちの担当教師の人は始めて僕という特殊なケースにぶち当たったそうで、説明が下手だったらしい。

安西先生、学校が辛いです……！

どっちら僕に問題らしい(後書き)

ストーリーは進まない……！

これがTwocceクオリティ……！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7680y/>

---

どうやら僕は二重人格らしい

2011年11月29日00時55分発行